

社会学的想像力の今日的意義に関する考察

— ひとつの可能性としてのツーリズム —

A study on the contemporary significance of the Sociological Imagination

— Tourism, as one of the possibilities —

高橋 薫

TAKAHASHI Kaoru

1. はじめに

『社会学的想像力 (Sociological Imagination)』は、1959 年に出版された本のタイトルにある考えである。本書はミルズ (Charles Wright Mills 1916-1962) が社会学という学問のあるべき姿に対して抱いた疑問に端を発しており、当時の社会学が抱えていた問題点や、社会学者が本来担うべき社会に対する責任についての考察が述べられている。それゆえ、従来はあくまで社会学という学問の世界において多く語られてきたものだ。しかしながら本書で述べられているような「個人と社会のつながりを見ること」「多様性を見つめること」というテーマは社会学者に限らず、現代社会に生きる我々ひとりひとりに必要な視座であると筆者は考える。

本稿では、ミルズが説いた内容を今一度詳細に見ていくことで、社会学的想像力が今の時代にこそ見つけなおされるべき資質であることを明らかにしていく。さらにその獲得のための方策を考察し、その一つの可能性としてツーリズムを提案する。そして、現代を生きる我々にとっての社会学的想像力の今日的意義を見出していく。

2. 社会学的想像力とは何か

(1) 時代背景

社会学とは「社会が私たちがそうさせる事柄と、私たちが自分自身をそうさせる事柄との結びつきについて究明する」学問である。(ギデンズ 2009: 23) すなわち個人をとりまく環境や事象をその個人単体と結び付けて完結するのではなく、他者の存在や社会全体の構造が個人に与える影響や、逆に個人が周囲に及ぼす影響との作用といった広域で物事を考え捉えていく学問であると言える。そして、こうした社会学のあるべき姿と実態との乖離を指摘したのが、アメリカの社会学者ミルズである。

ミルズが『社会学的想像力』を発表した 1959 年は、米ソ対立を軸とする冷戦が特に

緊張した局面を迎えていた頃である。「資本主義対共産主義」という東西対立構造の下、世界が核の恐怖に脅かされていた当時、ミルズはこの単純なイデオロギー対立に一石を投じた。当時「民主的」なアメリカはすなわち「正義」とされ、それゆえ「誤った」共産圏と対立することへの疑問など生じる余地はなかった。それは学問の世界においても同様で、学者達の眼差しは共有されているストーリーへの疑問よりも、「いかにして社会秩序は保たれているのか」というシステムの説明に傾倒していた。(伊奈・中村 2007)

これに対しミルズは『社会学的想像力』の冒頭一行目で「罫に仕掛けられている」(1965: 3)と表現している。ここでいう「罫に仕掛けられている」状態とは、「自分の意志でしているつもりの生活が、個人の力ではいかんともしがたい全体社会の構造そのものに生じる、さまざまな変化によって支配されている」(ミルズ 1965: 3)状態のことをいう。つまり人々は、秩序が保たれているという前提の下なだめすかされているような状態にあり、結果として自分の暮らしが社会全体とどのようなつながりがあるのか気がつくこともなく、また社会全体を覆う秩序についてもそれを信じる他ない状態に置かれているというのだ。このことこそミルズが何よりも危惧していた点であり、そしてそうした状況を打破するためのヒントとして提示したものが、社会学的想像力であった。

地球規模の危機的局面においても支持されていた、「あくまで我々は自律した存在であり正しい立場に立っているのだ」という自負を問い直し、「アメリカ社会の矛盾、アメリカ社会の変容の方に目を向けるべきではないか」(伊奈・中村 2007: 78)というメッセージが、ミルズが社会学的想像力を訴えた背景にはある。社会全般で受容されている前提に目を向け、一部の誰か(ミルズが言うところではパワー・エリート)によってつくられた「公」ではなく、現状に対して疑問を抱く「私」を確立させ、そしてその先の存在としての「公」を構築していくために必要とされたのが、社会学的想像力なのだ。

(2) 3つの解釈

『社会学的想像力』は全部で十章(に加えて付録)から構成されており、第6章までの前半部分は当時の社会学に対する批判が、そして第7章以降の後半部分では、ミルズが思い描く社会学のあるべき姿と、そこでの社会学的想像力の役割や重要性が述べられている。よって本稿では第7章以降の後半部分を中心に、社会学的想像力とは何かについて、筆者なりの解釈を展開していく。

① 社会学的想像力＝多様性を見つめる力

ミルズは第7章「人間の多様性」の冒頭で社会科学は混乱状況にあると指摘し、さらにその原因はそうした社会の多様性を図る側(＝社会学者達)が多様性に欠けているからだとしている。(ミルズ 1965) 複雑で混とんとした社会では「多様なことを多様に見つめること」は容易ではない。しかしそこで小手先の調査手法やシステムを多元化していくのではなく、対象の多様性を見据えたうえで調査する側の視点も多様になっていくべきであるというのが、ミルズの主張である。(伊奈・中村 2007)

つまり既存の枠組みから問題を解明しようとするのではなく、従来誰も気にとめて

こなかったような、枠組みと枠組みの隙間にも目を向け、むしろそのような立場からの「視点の変化を楽しむ」(伊奈・中村 2007: 30) 多様性に気づくための力が、社会学的想像力であると言える。

② 社会学的想像力＝歴史における「いま」を問う力

続く第8章「歴史の効用」では前章で論じた個人の多様性について、歴史の次元で問うていくことの重要性が述べられている。特にミルズは、かつての歴史の発展過程を単線的なものに帰結させるのではなく、あり得たかもしれない別の現在をも想定し、近代化の在り方を多様に想定し描く分析の必要性を指摘している。(伊奈・中村 2007) 大きな歴史の流れの中で「われわれはどこに向かっているのか?」(ミルズ 1965: 201) という問いに答える努力を絶えず行い、現代の動向に注意を払うことではじめて、我々は未来の動向を査定することが可能となるというのだ。このようにして「今」を問うことはすなわち歴史を構成する人間ひとりひとりの生活史(ライフストーリー)を見つめることであり、そうした個人と彼を取り巻く制度との「間」を往復することが、ひいては多様性を見つめることに通じる。そしてその往復作業の際に必要な力こそが、社会学的想像力なのである。

③ 社会学的想像力＝理性を持ち自由を求めるための力

第9章「理性と自由について」では、人々が理性を手により自由を求めて能動的に考えるための手段として、社会学的想像力の重要性があげられている。

かつて自由と理性は比例する関係にあると思われていたが、しかし産業革命という社会全体の合理化を経て実際に蓋を開けてみると、むしろ反比例の関係で減少していくことがわかってきた。(ミルズ 1965) ここでのミルズの問題提起は二点ある。一つは、こうした合理化の中で自身が理性的になることよりも、消費や余暇を享受することを選択する人々が増殖する状況について。そして二つ目は、こうした状況に当時の社会科学が真剣に向き合おうとしていない点についてである。

述べられてきたように歴史というものは今、全ての瞬間に下される幾多もの決定の繰り返しであり、つまり未来へと繋がる歴史をつくる決定権は、今を生きる我々が持ち得るものだ。しかし人々はそうした決定によって生じる責任を負うことよりも、合理化された構造に埋没した存在となることを選択している。こうしたことが結果として「アメリカは正義であり、共産圏は悪である」という単純な一元化構造へとつながってきた。このような状況で社会科学者たちが大衆に対して本来持つべき責任とは、すなわち未来を形成するための意思決定の射程を押し広げることであり、そこで求められるのが社会学的想像力であると言える。

(3) いま、社会学的想像力を見つめなおす意味

ミルズが『社会学的想像力』を書いてから現在までの半世紀、世界を巡る情勢は大きく変化を遂げた。80年代後半から90年代初頭にかけての東西対立構造の終結やソビエト連邦の解体以降は、「民主的な超大国アメリカ」が世界を10年近く牽引した。しかしそうした時代は2001年のアメリカ同時多発テロによって幕を閉じ、それまで絶対的正義として信じられていた民主主義の推進が、決して世界秩序を永続的に約束するものではない、ということが露呈したのだ。そして更なる事件が、2007年にアメリ

カのサブプライムローンに端を発して起きた世界金融危機である。合理的な組織に身を置いてさえいれば陽気でいられた人々達も、もはやいつリストラの憂き目に遭うか分からない、先行きの見えない状況の中で不安に晒されることとなった。

21世紀を迎えて続いたこれらの大きな出来事は、これまで正義と信じられていたことへの信頼を根底から覆させられるものであった。世の中には確かなものなど存在せず、常に「今」の在り方が正しいのか、どのような意味を持つのかを問いただしていかなくてはならない、不安定で不安な感じに苛まれていると言える。これはつまり、半世紀前にミルズが『社会学的想像力』を発表した当時と現代とでは根底にある問題は実は変わらず、そこで語られている内容もいま改めて目を向けるべき本質的なことなのではないかと、筆者は強く考える。

いまやアメリカが世界を牽引する構造は脆くも崩れ落ち、そしてそれとは対照的に途上国として見なされてきたアフリカやアジア諸国がめざましく台頭をしてきている。(宇野 2010) つまり従来の一元的な価値観を捨て新たな視点に転換して考えることが、まさに求められているのだ。ミルズは「かつては健全にみえた古い決定が、いまとなつては途方もなく愚かな精神の所産と思われる。驚くという能力がふたたび、いきいきとよみがえる」(1965: 10) としている。このことから、パラダイムシフトをはかり世界の多様性に目を向け、そのうえで今あるべき道筋を考えて行くことが、いつの時代においても普遍的な要件なのだと考えよう。

(4) 必要とされる背景

社会学的想像力が時代を問わず必要とされるものであることは明らかになった。しかし如何にしてそれが人々に受容されるべきであるか、という点では個人を取り巻く状況において大きな相違がある。

20世紀初頭の工業化により、人々は生まれ育った土地や家族にこだわらず、仕事を求めて都市部へと移住し、そこで新たな人間関係を構築することが可能となった。しかし近年の傾向は、こうした移行を第一の個人化としたうえで、更に移行した先の中でも更なる「第二の個人化」が生じているという意見が出ている。(浅野 2010) 第一の個人化では、それでもまだ伝統的共同体とは異なる、職場や労働組合といった「新たな共同体」が個人を守ってくれていた。だが現代ではそれらすら機能不全に陥っており、個人は孤立し、自分の身は自分で守らなくてはならない状態にあるという。つまり共同体からも流出した個人にはもはや、何も考えなくとも黙って従っていればよい「疑いのない前提」(伊奈・中村 2007: 78) など存在しないのだ。

しかしながらその一方で、“自己責任”の一言であらゆることが片づけられてしまうように、個々人が下さなくてはならない決断、そしてその結果受け止めなくてはならない責任の重さは増すばかりである。ミルズは労働に疎外されつつも残された部分で消費や余暇行動を楽しむ人々を“陽気なロボット”と称したが、今日ではその消費や余暇の部分でさえも、常に不安に脅かされずにはいられない状況に置かれてしまっている。

こうした個人化が進む社会で更に危惧されるのは、個人が身を守ろうとするばかりに、その視線が内向きに閉ざされてしまうことである。ミルズはこのこと自体につい

ては、決して悪しきことではないと擁護している。しかしそうして内向き志向になることが、果たして自身の最低限の生活を守るための正しい方法なのだろうか。なぜならミルズも、「かれらに必要なものは、(中略)情報を駆使し理性を発展させることによって、かれら自身の内部や世界におこることがらを、明晰に総括できる資質にほかならない」(1965: 6) と述べている。つまり今現在自身が直面している問題に対してのみ向き合い短期的に決着をつけようとしても、所詮はその場しのぎの対応にすぎないことも多々ある。そうではなく、個人の枠組みから脱して広い視野のもと時には他者の立場に立ちつつ考えなくては、問題の本質は見えてこないのだ。誰もが追い詰められ他者を思いやる余裕も持てないような今の時代だからこそ、社会学的想像力が重要だと考える。

(5) 社会学的想像力喚起のために

では、社会学的想像力はどのようにして身につけることが可能なのだろうか。ここでは『社会学的想像力』の付録「知的職人論」の中でミルズが列挙した7つの具体例をベースに、今日我々一般大衆が身につける場合を想定し考察した。

① ファイリング作業

これはつまり新たな知見を得た際、それをただそのまま飲み込むのではなく、咀嚼すべきだということである。過去に蓄積してきた経験・知識と新たに得たもの、その全てを一度広げて見ることで、自身が積極的に取り組んでいたことや潜在意識下の興味関心事項への気づき、またそれらをより深めていくために必要な今後の方策が明らかになり、将来へ向けての態度に活用することが出来るとしている。つまりあるものをあるがままに吸収していくのではなく、それらをカテゴリー化するものや共通性・相関関係を見出す作業を習慣化することで、社会学的想像力は喚起されていくのだと考えられる。

② 言葉への関心

ミルズは「いろいろな問題を規定していく語句や用語について自由な態度をとることも、しばしば想像力を解放することになる」(1965: 278) としている。要するにある言葉の意味が固定概念として共通認識されていたとしても、改めて辞書を引き本来持つ意味や同義語等を探ることで、その語が有する観念そのものを真に理解し、異なる角度から吟味することが出来るというのだ。何気なく使用している流行り言葉や外来語も、改めてその語源や正しい使い方に目を向けるだけで、新たな知見が広がるという様に解釈できる。

③ 極端な形態の仮定・比較

これは目前の一対象のみを追うのではなく、常に複数の対象を比較し物事を考えるべきであり、そこに適切な比較対象が存在しない場合には、自身で比較しうる極端なケースを想定し、多様な観点を作り出してみるべきだというのだ。周囲の様々な人との対話を通じて他者の視点を得ることも、これには含まれるだろう。つまり今自分に見えているものが全てではなく、あらゆる視点が存在するため、結果についても多様な可能性があるという認識を持つことで、社会学的想像力は養われるとしている。

3. ひとつの可能性としての提案 — ツーリズム

ここまで、ミルズが説いた社会学的想像力の姿や必要とされる背景、そして喚起のための手段を見てきた。では具体的にどのような行動が社会学的想像力を喚起させるのだろうか。そこで筆者は、一つの具体的手段としてツーリズムが有効であると考えた。以下では、ツーリズムの本質に迫ると共に、筆者がそう考える根拠を描いていく。

(1) ツーリズムとは何か

ツーリズム (tourism) の語源はラテン語で「ろくろ」を表す *tornus* とされており、諸国を巡回旅行する意味だとされている。(中尾・浦 2006) 日本においては幕末に入ってきたこの *tourism* という言葉に対して、訳語としてあてられたのが「観光」である。本稿で用いるツーリズムという言葉には、観光政策審議会の定義である「自己の余暇の中で、自身の欲求に基づき、日常生活圏に再び戻ってくることを前提として一時的に離れる行動」(中尾・浦 2006: 5) に加え、筆者独自の視点である以下3点の意味合いを含める。

① “観る” だけではない「何かを得たい」と渴望する気持ち

これは観光の歴史的発展段階に深く関係する。古代から19世紀初頭までは、観光は宗教上の信仰心とその動機の中心にあり、それを享受出来るのは一部の特権階級層に限られていた。だが19世紀中頃を過ぎると、交通・通信の技術革新や産業革命による余暇の誕生により、広く一般大衆も、純粋な好奇心・知識欲を動機とした観光を楽しむことが可能になった。塩田正志はこうした推移について、前者を *tour*、後者を *tourism* と言葉を使い分けている。(鈴木 1974) ここではその定義に基づき、「行きたい・体験したい」という、ただ“観る”だけではない、また巡礼のような「しなくてはならない」とも異なる、何かを渴望する気持ちを伴う行動としてツーリズムをとらえる。

② 主体の精神的成長を促す“ろくろ的らせん上昇効果”

ろくろで壺などの陶器を製作する時、上から見ると、のせられた粘土はひたすら同じ場所を回転しているようにしか見えないが、横から見た場合、それは形を変え少しずつ高次元へと昇っていつている。この現象をそこから派生した言葉である *tourism* に置き換えて考えてみたい。ツーリズムにおけるツーリストの行動とは、日常生活圏を出発し、一定時間を非日常生活圏で過ごした後に再び元の日常生活圏へ戻ってくる、円周行動となる。ツーリストには外見上の変化は生じないかもしれないが、しかし実際には非日常生活圏で得た経験を通じて、何らかの内面的変化が生じているはずである。その姿はろくろを横から見たときのように、出発時よりも少しずつ高次元へ昇り元いた場所の一段上へ帰ってくる、らせん運動のようだ。「かわいい子には旅をさせよ」のことわざも、ツーリズム経験により人はより高次元へと成長することを知っているからだと推察される。本稿で用いる「ツーリズム」という言葉は、ただ空間を移動するだけではなく、その主体の精神的成長を促すような“ろくろ的らせん上昇効果”の

意味も含めて使用する。

③ 異なるものの中に“普遍的”なものを見出すこと

tourism の訳語である「観光」、ここでいう光とは「国の光」を意味し、政治・文化・風俗などその国を象徴するものであるとされている。(中尾・浦 2006) 一方更なる語源を探るためにラテン語で光を意味する言葉 *lumen* を辞書で引くと、「生者がこの世で享受する光、生命」(研究社 2009: 373) という記述がある。日本語から探った「光」の解釈は、言わば「外向きの顔」であった。しかしラテン語の解釈ではそれだけではなく、日常生活の中で人々が放つ輝きも「光」として含められているようだ。つまり「観光」という行為は、ある国の優れているところだけではなく、そこで暮らす人々の何気ない日常をも観察対象とし、そこから放たれる輝きや人としての普遍性をも見出すことであると解釈出来る。

(2) 社会学的想像力喚起手法との共通点

そのツーリズムがなぜ社会学的想像力の喚起に有効であると考えなのか。それは、個人が日常生活圏での枠組みを離れその外部へ飛び出すというツーリズムの特殊性が、ミルズが提示した社会学的想像力喚起の具体的方法と親和する側面を複数有するからである。以下ではツーリズムの主要要素を分析すると共に、その親和性を解説していく⁽¹⁾。

① 出会いを通じた多様性への気づき

ツーリズムでは言語や宗教・文化・生活習慣など、多くの違いが溢れている。そうした異文化環境の中で一定時間を過ごすことは、まさに新たなものとの出会いの連続であり、そこには多様性溢れる世界への気づきがあることは、改めて言及するまでもない。このようにツーリズムとは、自分が日常生活圏で得た常識や知識を積み重ねてきたファイルに、海外で新たに加わった知見をファイリングし直すような作業であり、そこにはミルズが唱えた社会学的想像力喚起のための手段に通じるものがある。また言葉が異なる環境に身を置くことで、当然のことながら主体の言葉への関心も高められる。挨拶程度はその国の言葉を覚えようとする中で、言葉の背景にある文化価値観に触れ、それが多様性への気づきとなることもまた、ツーリズムによる社会学的想像力の喚起であろう。

② 「外国人」になって獲得する視点

海外へのツーリズムでは、日本国内では何不自由なく出来ているようなことも思う様にいかず、まるで取りつく島もなくなり、ただ心細い思いをすることがある。こういった孤独や不安といった日本では味わえない思いに晒されるのもまた、ツーリズムの特徴だ。

しかし一方で、窮地で地元住民に助けられたり、ふと投げかけられる笑顔ひとつに救われるような思いを味わうのも、ツーリズムならではの体験である。そして中にはそうした時に覚えた感動を帰国後も忘れず、日常生活圏に帰ってきてからも逆に今度は日本という「異国」で心細い思いをする人を助けてあげよう、という気持ちを抱く者もいる⁽²⁾。異国を訪問し自身が「外国人」になることで初めて見えた視点を日本へ持ち帰り、今度は日本においても他者の立場になって考えること—すなわち、日本にいな

らも「もし自分が外国人だったら…」という極端なケースを想像して行動すること—を可能にする力がツーリズムにはあると言えよう。

③ 自己の新たな位置づけの獲得

海外を訪れるツーリズムには、いわゆる自分探しのように日常生活圏では埋没していた本当の自分に向き合う要素もある。そして時にその対象は自分個人に留まらず、日本という大枠にまで広がる。外国を訪れることで自国を客観的に見つめなおし、その良いところ／悪いところの双方に向き合うことはありがちだ。しかし興味深いことは、それがただの観察対象としての日本ではなく、自分探しの延長線上、すなわちアイデンティティの依り処として認識されていることだ。これは個人として存在していた自分が、ツーリズムを通じた自分探しを経て「私という個人」と「日本という国」の間につながりを見出していると考えられる⁽³⁾。このつながりを見出す力こそが、ツーリズムによって得られる社会学的想像力であると考えられる。

社会学的想像力の効果については、「多様性を見つめる力」「歴史における『いま』を問う力」「理性を持ち自由を求めるための力」であると考察したが、これらに共通して言えることは「視点を変化（＝パラダイムシフト）させる力」であり、さらには「視点の変化を楽しむ力」（中村・伊奈 2007：30）ということだ。他者との関わりを通じて人間の多様性や普遍性に気づくことの出来る体験とは、サークル・ボランティア活動・インターンシップなど他にも多数ある。しかし、日本という国を外から見る「視点の転換」それ自体を楽しみながら、個々人を更なる精神的成長へと押し上げることが出来るのは、ツーリズムがどの類似行動にも増して持ちうる強みであると考え、有効な一手段として提案をした。

4. 考察

(1) いまの日本の姿

『社会学的想像力』が出版された今から半世紀前、高度経済成長下の日本では、輝かしい未来像が共有されていた。しかし物質的豊かさや成長を追い求めた先に待っていたのは、公害や経済不況・政治不信といった現在まで続く暗澹たる様相である。そして現在、3.11の東日本大震災を契機に、これまで自分達が歩んできた歴史については、安全とされていたこと・正しいとされていたことが瞬く間に覆された。また待ち受ける未来についても、見通しの立たない震災復興や、更には社会保障制度への不信任感・忍び寄る欧州経済危機の影と、いつ自分の平穏無事な日常が崩壊するか、不安の種は尽きない。

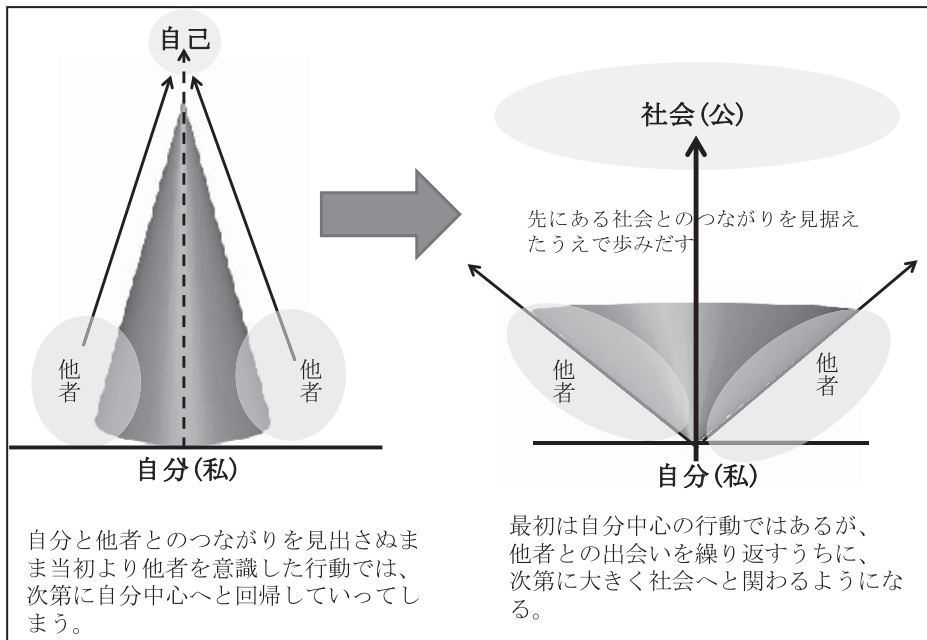
しかしながら、その中にも希望はある。「畏にかかっている」ことに気がついた人々は、自発的な情報収集や発信、ボランティアや寄付などの他者を思いやる行動において、明らかな変化を見せつつある。だが一方で懸念されることは、こうした変化が衝動的で、一時的なものとして終息してしまうこと。また、溢れる情報に溺れ自分は真にどうありたいのかを見失ってしまうことだ。

(2) おわりに—社会学的想像力の今日的意義

こうしたジレンマについて伊奈・中村は、「自分を大切にすること—（中略）自分自身を出発点とすること—から出発すべきなのではないだろうか」（2007：9）としている。先のツーリズムの語源であるろくろに重ねて言えば、土台はあくまで「自分」であり、その目的もまた「遠くの他者」ではなく「自分」なのだ。しかしそうして発進させられた行動を通じて他者に会い、再び自分に帰るということを反復するうちに、徐々にその行動の範囲や視野は広がっていき、より多くの他者への出会いや気づきとなり、結果的には社会全体に関わっていくこととなると描くことが出来る。

当初より他者を意識した行動では、その土台自体が不安定であり、また他者とその先の社会とのつながりを見出さぬまま走り出して行ったのでは、先がすぼまった壺のような形でせつかくの行動が完結してしまいかねない。そうではなく、ゆっくりと自己と他者との反復を繰り返すことでそれが次第に大きくなっていく、大皿を成型するろくろのような考え方が、今の時代にこそ重要だと考える。（図1 参照）

図1 今の時代に求められる、ろくろのような考え方



（筆者作成）

社会学的想像力の今日的意義、それは共同体から流出したひとりひとりの人間が現代を生き抜いていくうえで、彼らを取り巻く社会と関わるための大きなろくろを回転させるためのものと言えよう。ミルズは『社会学的想像力』を以下の文章で締めくくっている。

個人の生活と社会の形成は、それら諸関係の結びつきのなかで展開する。社会学的想像力はこの結びつきのなかに、現代における人間生活の質を認識する可能性をもつものである。（ミルズ 1965：295）※ 下線は筆者による

震災以降、“絆”という言葉が頻繁に耳にするが、そこには物質的豊かさから、他者とのつながりに幸福を感じるような価値観への変化が見てとれる。そして「個人と社会とのつながりを創造する社会学的想像力が生活の質を認識させる」としたミルズが唱えたかったこともまた、こうした価値観に通じるものではなかろうか。

身近な他者を思いやり、また直接は見えない遠くの他者を想像して行動すること。そこで生まれるつながりが、自分の幸福として再帰し生活の質を底上げしていくような時代だからこそ、社会学的想像力は意義を持つものであると考える。

■注

- (1) 筆者はツーリズムという行為全般が社会学的想像力喚起には有効であり、それは国内外の範囲を問わないと考える。しかし「日常との対比に会う」という一側面を取り上げる時、より分かりやすいイメージを描く意図に基づき、本稿ではツーリズムを日本から海外を訪れる場合を想定し論じている。
- (2) アンケート調査（2010年、立教大学にて10～70代の男女254人を対象に筆者実施）でも、「海外旅行経験から帰国後の日常生活に影響を与えたような出来事は」という質問（自由記述）に対し、「親切を受けそれが思い出として深く残っていることから、日本の旅行者へも同様にしたいと感じた」（20代女性）、「日本に旅行に来た外国人には出来るだけ親切にするように心がけています」（50代女性）という回答が見られた。
- (3) 山口誠は、旅行エッセイスト・蔵前仁一作品を取り上げ、その中での日本社会とは「『わたし』が回帰する場所」であり、外国で生きることによって自身の内なる日本人性を意識する「集団的アイデンティティ」が前提とされている、と分析している。（山口2010）

■参考文献

- 浅野智彦編 『考える力が身につく社会学入門』 中経出版、2010
- ギデンズ、アンソニー（松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・立松隆介・内田健訳）『社会学 第五版』 而立書房、2009
- 伊奈正人・中村好孝 『社会学的想像力のために一歴史的特殊性の視点から』 世界思想社、2007
- 中尾清・浦達雄編著 『観光学入門』 晃洋書房、2006
- 鈴木忠義 『現代観光総論』 有斐閣、1974（塩田正志「観光の『概念』と観光の歴史」）
- 宇野重規 『〈私〉時代のデモクラシー』 岩波新書、2010
- ライト・ミルズ、チャールズ（鈴木広訳）『社会学的想像力』 紀伊国屋書店、1965
- 山口誠 『ニッポンの海外旅行 若者と観光メディアの50年史』 筑摩書房、2010
- 『羅和辞典改訂版』 研究社、2009